校長室の窓から

思い出の先生① Ｉ先生のこと

『I 先生から吐き気がするほど鍛えられた漢籍・・・』とか、『I 先生とのバトル』などと失言したのは先月号でした。そんなＩ先生のお話です。

中学１年生の春、私はＩ先生の「国語塾」に入りました。Ｉ先生は当時４０代の半ば、中学校教師を辞して私塾を開かれたところ。それから高校３年までの６年間、私は塾生でした。

敬虔なクリスチャンであるＩ先生は、「人間」とか「生きる」ということについて考えるのはとても大切だと、ことあるごとに説かれました。そんなＩ先生の授業は９０分。学校の教科書は使わず、さまざまな教材を用いて課題をじっくりと追究する。とりわけ古典（古文・漢文）の学習では人間について考えさせられることが多く、その後の私の人生に大きな影響を与えたと思います。

高校生になると、漢籍（漢文）の教材が長文になりました。たくさんの漢籍の中からＩ先生が選ばれ、自作されたテキストで学びます。

ちなみに、学校の教科書の漢文は、「返り点（レ点など）」や「送り仮名」と「。」や「、」がついていて、とても読みやすくなっています。しかし、Ｉ先生の漢文にはそんな「手掛かり」は一切なし。B4 用紙いっぱいに、小さい手書きの漢字が並んでいる。それがテキスト。そして宿題は一つ。「訳してきなさい。」

当時、女子３名・男子２名、計５名の塾生がいましたが、この B4 用紙のことを、「悪魔の手紙」などと呼んで、少しうっぷんを晴らしていました。（もちろん私は、心から「ミカエル(天使)の手紙」だと思っていました。・・・嘘です。）

５人の塾生は高校の図書室にこもって、数冊の大きな漢和辞典を引き比べながら一語一語調べました。

「いったいどこで切るんだ！」

「この漢字は動詞？　名詞？　形容詞？」

結局、意味の通らないような和訳を持って授業に出る。すかさず Ｉ 先生の容赦ない追及。そして、だいたいいつも「ふつつかだなぁ」の決まり文句。そして、ふつつか者の５人は、肩を寄せ合ってとぼとぼ帰る。そんな繰り返しでした。まさに、私の青春は「悪魔の手紙」（いや「ミカエルの手紙」）とともにありました。

でも、Ｉ先生との攻防も、４人の仲間との奮闘も、実は結構楽しかった。

『論語』に始まる四書五経や『小学』・『呂覧』など。Ｉ先生が、なぜ、これらの古典にこだわっておられたのかを直接伺ったことはありません。しかし、塾生としての６年間に、その意味を教わったように思います。

例えば『小学』には、こう書いてあります。

人の道有るや、飽食暖衣、逸居して教なければ則ち禽獣に近し。　※読み方は数通りあります。

（人は、飽きるほど食べて着飾り、気楽に暮らしていても、教育がなければけだものと同じである。）

（訳：久村）

ここでいう教育とは、現代の「教科（＝知育）」ではなく、『小学』や四書五経などを指します。それを現代の用語で言えば「徳育」となるでしょう。つまり、「徳育」がなければけだものが育つと言っているのです。

古来、教育の柱は「心の持ち方やありかた、生き方の教育（徳育）」であり、その「教科書」は、仏典や『小学』・四書五経・『近思録』・『呂覧』・『貞観政要』などでした。今では捨て去られたようなこれらの書ですが、かねて作家山本七平はこの状況を嘆き、『小学、近思録、論語、メシヤリーム、ベン・シラの知恵』等を徳育（道徳）の教科書にすべきだと主張していました。

昨年８月に、Ｉ先生は天に召されました。

全身全霊で教師たらんとし、人を育てようとしておられたＩ先生は、今なお私の恩師であり、遠く及ばない理想です。

哀之以験其人（之を悲しましめて、もってその人を試す。）

悲しみの中で、その人の人格が試される。(訳 久村)

苦之以験其志（之を苦しましめて、もってその志を試す。）

苦境・苦難の中で、その人の志が試される。（訳 久村）

「呂覧」六験より

・・・不肖の弟子に託された願いをかみしめつつ。